

ペリーシヨート賞



来客

蚯蚓乃干物



気づきは一本の陰毛からだった。

それは座布団の中央に悠々と鎮座し、私を目の前にして陰部の保護器官とは思えぬほどの落ち着きを払っている。一、二度のうねりによって生じたちぢれの終端は、宙の一点を抉るように睨み付けて離さない。裸電球から漏れ出した只の黄光すらも、その表面にねつとりとした生命のぎらつきを供給している。そう、それが性毛の一種であることを知覚させる余裕は皆無だった。

私はそれとの出会いを純粋な驚きで迎え、毛根からそつと——傷がつかないよう右手の親指と人差し指で優しく摘み上げ、ついまじまじと見つめてしまった。あああ、なんと立派な毛並であるうか。私の貧相なトランス農場においては栽培・繁殖すら叶わないであろう、実に立派な代物だ。

……私ではない。はて、では一体誰のものだというのか？

突如、それは名前すら忘れた中学の同級生の顔を想い出すかのごとく、うっかりモヨオしてしまった。失礼。ここでもし私がか弱き乙女ならば「ちょっとお花を摘みに行つて参りますわ」

などと、日本語独特の婉曲表現で美化できていたかもしれない。だが何しろがさつな独り身暮らしの男なので、そういつた読者様へのお心遣いまで気の至らなかつた点をご容赦願いたい。

そんな具合で別に大した祭りという訳でもないが、催してしまつたものだから性急に対処する必要が生じている。私は僅かな惜別の念と共に恥毛を破棄し、便所へと足を早めた。

と、戸を開けた刹那——

便器から溢れだす圧倒的な違和感の熱風に押し出され、私は思わず一步、一步、ついでもう一步後ずさつた。ご覧の通りこちら一見際立つて奇妙な点は見当たらない。便器と洗面台で構成されたごく一般的な洋式スタイルの便所である。だがしかし私の生存本能に基づく第六感、この便所に潜む悪魔の爪痕が絶対的な真理に矛盾を来しているかと囁くのだ。できればこのまま回れ右をして退場し、どこか別の便所で用を済ませたい。だが手前の膀胱は尿意という名の生理現象を言い訳に、時間の融通が利かないお役所主義をなおも継続して貫き通し始めてしまったのだ。

いよいよをもつて私は覚悟を決めた。恐る恐る最大限の注意

と緊張を保ちながら、行為に必要とされる一通りの準備を終え、便器の前に悠然と立ちほだかつたところで――

――既に持ち上げられた便座を目の当たりにした。

手前御年十八を超えるか超えないかといったところだが、驚きのあまり膝が震えて失禁してしまうほどの恐怖を経験したのは、この時が人生初であり恐らく最後となるだろう。唯一の僥倖は既に諸々の準備を終えていたため、失禁による被害が微々たるものだった程度のことだろうか。そう、私は気づいてしまったのだ。この不可解な現象を説明するに事足りる、決定的な真実に気づいてしまったのだ。

それではそろそろ、これじゃあ何のことかさっぱり分からんという読者の皆様方に事の経緯をお伝えするため、脳内のビデオテープに三倍速で巻き戻しをかけて今朝の出来事を反復するとしよう……。

某田舎国立大学推薦受験合格通知が自宅に届いたその日、既に私は個人用宿舍転居の意向を固めていた。それから早四か月。昨日の夜までにはあらかたの荷物を宿舍まで運び終えたので、後は来たるべき独身貴族への夢を馳せるだけというところまで迫っていた。独り暮らし。ああ……なんといい響きだろうか。それは孤高の楽園をただ一人のアダムとして、設計する権利が

与えられたにも等しいと言えないだろうか。

一夜明けて日曜日。珍しく早起きをする、ふと思いついたかのように――実際のところそれは予定調和だったが――段ボールの山からサイフォンセットを取り出し、こたつの上に部品を並べた。

小遣いで買った私のサイフォン――！

絶妙なコーヒー本来の味と香りを生み出し、おまけに圧力の勉強までできるといふ大変お買い得な商品だ。これほどまでの贅沢嗜好品は私の所有物の中で他に類を見ない。

私はお湯を沸かす、コーヒー豆を挽く、漏斗を差し込むといった一連の行為を、事前に脳内で予習した通りに淡々とこなしていった。こういった手順の定められた行為を厳格に実行するという、若干マゾヒズム的ニュアンスを含む悦びは、やはり独りであるからこそ感じとることができるものだ。そのうちにフラスコ内の熱湯が上のガラス風船まで昇り始めたので、私は専用のかくはん棒で豆粉一粒一粒をゆつくりと、そつと、撫で回すようにかき混ぜた。この動作はほどほどにしておかないと豆の苦みがコーヒーに現れてしまうので、ぜひ注意していただきたい。ここまでくれば後は火を消して、抽出液がフラスコへと出戻りしてくるのを待つだけ。フィルタから黒豆出汁の滴が零れ落ちる度に、ほろ苦い香りが部屋いっぱいに満たされていくようである。

と、ここで当初の予定よりも大分お湯の量が多いことに気づ

いた。私はそんなにも一杯目を楽しみにしていたというのか。見る見るうちにフラスコはコーヒーで溢れかえりそうになり、とうとう供給は需要を上回ってしまった。慌てて手元にあったどんぶりへコーヒーを並々と注いだ、それでも見積もつてあとフラスコにカップ一杯分の量は残ってしまう。さすがにこれ以上コーヒーを飲むことは、一日のカフェイン摂取限度量の観点から好ましくない。無念、残りは冷蔵庫に仕舞っておくとして、まずはこのどんぶりのコーヒーを楽しむとしよう。今まさに運命のサイフォンコーヒー君一口目を口に運ぼうとした、その時のことである。

ゴツゴツ。

唐突に玄関から射出された無機質なノック音は、狭い部屋の中を隅から隅まで縦横無尽に反射し、最終的に私の鼓膜を震わせることでその役目を終えた。私は手にしているどんぶりと玄関の方を見比べながら少しばかり逡巡し、若干の煩わしさを憂いながらむっとして重々しく口を開いた。

「開いていますよ」

そう、今思えば私は何と横着だったのだろうか。わざわざ我が家まで足を運んだ客人に対して、家主はほんの二、三步で届く玄関口まで出迎えないという非礼を見せつけたのである。するとそれに応じたのか、一拍遅れて錆び付いた鉄製の扉がゆっくりと開き、玄関の向こう側からうら若き乙女が姿を現した。念のためもう一度見返したが、紛うこと無くうら若き乙女だっ

た。

髪はショート、円らかな瞳、鼻は高からず低からず、胸は抑えめ控えめで、よく引き締まったナイスボディ、水も滴るジャージ姿のいい女。額から顎にかけてタラリと流れ落ちる汗が、大変色っぽいもので実によろしい。若干息を切らしているところから類推するに、どうやら彼女は運動直後だろうと見受けられる。

そして——彼女は部屋の主の姿を確認すると、不幸にも眼前にいる人物がどれほど卑しいかを理解していないが故に、「おはようございます！」と爽やかな挨拶をするという愚行を犯すにまで至ったのだ。

私は己の眼前で発生したあまりにフレッシュで、実に大学生らしい爽快感を含むイベントに対して、手にどんぶりを抱えたまま視線を下に向けつつ、

「お……おはようございま……」

と消え入るような声でひっそりと呟くことしかできなかった。

だがこのように述べると、まるで私が対人コミュニケーションに何らかの障害を有しているのではないかと訝しみ、慈愛の視線をこちらに向けてくるような大変憐み深い読者様がいらっしゃるかもしれないので、念のためここで断っておこう。実は私長らく男子高の名を冠する牢獄に収監されていた。そのため性別上女性の面会人は刑期三年間のうち一部の教師と母親のみとい

う、熟練の僧侶も裸足で逃げ出すような禁欲生活を続けてきたのだ。こういった経歴を持つ私にとつて、同年代の女性との会話は長年己の願望でもあり、同時に畏怖の対象でもあつたことを皆様にもご理解いただきたい。

対して彼女は私の意味深長な態度に煩うこと無く、体育会系特有のテンションとノリで既にベラベラ喋り始めていた。具体的には、

「私隣に引越してきた者です！ え、これ？ いや、朝からちよつと五キロぐらい走ってきたんすよーアハハ。この大学広くてジョギングにピツタリと思いません？ よかつたら今度一緒に走りましょうね！ あ、これ引越し祝いの汗拭きタオルです、どーぞ！」

などというようなことを、早口でまくしたてられてしまった。ああ、これだよこれ。まさに人物像、行動共に第一印象通りではないか。とはいふものの、確かに彼女は私が最も苦手とする体育会系の生命体ではあつたが、何しろ先述の通り無駄に美人だったので、「ああ……そう、フフン」というような小馬鹿な態度をとることもできず、正直反応に困つてしまつていた。いやそれ以前に、もし「キスをすれば子供が出来る」学説が高尚な学会で発表されたら、割と抵抗なく受け入れるかもしれないほどピュアなチェリーボーイ君にとつては、もはや会話の相手が若い女性というだけで、既に心臓バクバク瞬きパチパチ口はカラカラだったのだ。

だがこのまま引き下がるわけにもいかない。ここで爽やかな隣人アピールをしておけば後々彼女との交流の機会も増え、我が学園生活をより高みへと導くことができるに違いない。そうだつ、私よ、ここが正念場だ！

「あ……あ、あのつ」

「ん？」

「コーヒー……飲みます……か？」

一瞬の沈黙。

ああ……またやつてしまった。

普段散々に気を利かせると言われる私だが、まれに気を利かせてみるといつもこうなつてしまう。そもそもコーヒーというのが不味かつた。運動直後の乾いた喉に、私は何てものを飲ませようとしているのだろうか。もう終わりだ。おしまいだ。初対面からこんなことになつてしまうとは実に情けない。かくなる上は宿舍を夜逃げして宅通に切り替えるしか道が残されていない。さあ、早く荷物をまとめて実家までの電車のチケットを買いに行くとしよう……。

として彼女の顔をチラリと伺うと、案外満更でもない、いやむしろコーヒーを待ち望んでいるような期待の表情を浮かべていた。

「いいんですか？」

「え、ええもちろん。す……少し作り過ぎてしまつてね」

「あざっす！ いや私コーヒーには目が無くてさーアハハ。毎日朝から一杯は飲んでるんですけど、今日は引越したばかりだからどーしようか困っててさー。部屋入った時からいい匂いしてるなー、とは思ってたんだけどね。そいじゃご馳走になっちゃいますよーっと」

「あ……じゃ、じゃあちよつと待っていてくれるかな」

私は奥の段ボール箱から座布団を取り出し、表面の埃を軽く払ってからこたつ机の前に敷いた。

「あーいいっていいって！ 汗かいてるし。ここで立ったまま貰うってば」

「い、いいよ別に。それにほ、ほら、タオル持ってきたでしょ。それで汗……ふふ、拭きなよ」

「……ん。ならお言葉に甘えてー」

彼女は少し安心したかのように見える。

「いやー、お隣さん恐い人だったらどーしようか心配だったけど、優しいそんな人でよかったですわー」

見事だ。さりげない気遣いで相手に好印象を与える、我ながら自分を褒めてやりたいほどだ。これによってつい先月まで偏屈で卑屈で根暗な男子高校生だったという私の黒く薄汚れた経歴は、今日から優しく思いやりのある大学生という名を冠する、漂白剤に三日三晩漬けたんだ新品同様のレットルによって綺麗に貼り替えられてしまったのだ。

それにしても彼女の人懐っこさには困ったものである。他人

の部屋に上がり込むという行為——特に男女間に關しては、お互いの信頼關係を前提として成り立つものだと昔から私は認識していたのだが。

……もしや！ 彼女は私に気があるのではなからうか？

ほんの数分間會話を交わしただけで、まさか彼女は私の類稀なる男性としての魅力に気づいてしまったとでもいうのだろうか。ああ、だとすれば私はなんと罪深きことか。これから長い寮での生活が始まるうというのに、これでは彼女が私という存在を毎日のように意識してしまうかもしれないじゃないか。実に深刻な事態だ。

まったく、これが噂に聞くモテる男の優越感と言うやつなのだろうか。いや本当に困った、実に困ったものである。

そうか、本来私も女性に好感をもたれる程度には人間並のコミュニケーション能力と気遣いができていたのだ。ただ不幸にもそういった能力が発揮できる環境になかったため、すっかりそれが錆びついてしまっただけの話なのだ。そう、例えばコーヒーにミルクと砂糖を入れるかを尋ねる程度のささやかな気遣いならば、もはや私にとって余裕綽々お茶の子さいさいなのである。

「あ……み、ミルクと砂糖は……」
「無しで」

——それから彼女を部屋へ上げた後、我々はコーヒーを片手

に10分程会話を続けた。私はあまりの緊張状態でどんなことを喋っていたのかよく覚えていないが、何にせよ楽しい時間を過ごせたことに相違はなかった。そう、今思えばここまでは何の問題も無かったのだ。逆に言えばここまでの回想はただの余興であり、暇を持て余した読者様が鼻でもほじりながら一読できるように、筆者が書き下ろした駄文にすぎないのだ。私が伝えなかったことは、要約しておおよそ次の一文に収まる。

「彼女は去り際にトイレを借りた」

ここまでの説明を付随すれば、冒頭における私の困惑ぶりが多少なりともご理解頂けただろう。後は彼女が部屋を去った後、座布団を片付けようとした私が見つけたところから本編が始まるという筋書きだ。

さて、あまり長々と続けてもただでさえ薄い本編の中身が余計に薄まるだけなので、そろそろ私はお暇させていただくしよう。

とある男子学生の、とある男子寮での物語。